第27回「海の香りのする詩」

海をテーマにした「海の香りのする詩」の受賞作品が決定しました。
小学校から199点、中学校からは337点の応募があり、次のみなさんが入賞しました。

教育委員会生涯学習課 ☎㉕1268

小学生の部 **大賞**

「伊良湖水道の覇者」

鎌田　勝稀（神島小6）

神島のたこは　いきなりうまい
しかし近ごろ　島の周りからいなくなった
陸のタコつぼも出番なくひまそうだ
神島だこよ　どこ行った
この島の海より
好きな海を見つけたというのか
よその海に遊びに行って
迷子になったというのか

そうしたなか
数匹のたこが　久しぶりに島へもどってきた
よく帰ってきたな　神島だこよ
君たちのプライドを
見せつけるときがやってきたぞ
にえたぎる湯に
ダイビングするときがやってきたぞ
その前に塩で体を清めよう
ゴシゴシ　モミモミ　よごれを落とすのだ
気持ちよくなって　湯に入る整えをしよう

さっぱりしたところで　神島の湯にドボン
湯かげんはどうだ
ぬるくないか　熱すぎないか
ポーと桜色になってきたじゃないか　極楽か
八本の足も　行儀よくそろえて正座
湯から上がると
体全体から立ちのぼるおいしそうな湯気
たまらず　八分の一の足にかぶりつく
ああ　これぞ神島のたこ
磯の香りとうまみが口の中を征服する
円くて大きい吸ばん
白くてやわらかい厚みあるたこ肉
モグモグするたびに　だ液が喜びでうねる

神島だこよ　ありがとう
もっと　仲間にもどって来いと伝えておくれ
もっと　うまさと感動を伝えさせておくれ
伊良湖水道の味覚の覇者となろうじゃないか

応募作品に触れて　（選考委員長　北 佳子）

日常生活で海の香りを感じながら、過ごしている鳥羽の子どもたち。海との距離感は近く、海のめぐみや厳しさを感じる機会も多くあります。そんな日常のふとした瞬間や目にしたものなどから感じたことや考えたことを子どもたちは、素直に詩に表現しています。比喩や擬音語、擬態語をうまく活用し、さまざまな表現技法を使った子どもたちの作品は、読み手の心にすっと入り、感動を与えてくれます。

鳥羽でしか書けないもの、ここで生活しているから表現できるものがどの詩からも感じられます。大賞に輝いた2作品も含めて、鳥羽の魅力が凝縮されている作品がたくさんありました。

小学生の部（大賞）

近頃、島の周りからいなくなった神島だこ。久しぶりに戻ってきた神島だこを料理するときの表現が実に素晴らしい。たこの躍動感、におい、色、味まで伝わってくるようです。冒頭の「神島のたこは　いきなりうまい」からもわかるように、この詩には、勝稀さんの神島だこを愛する気持ちとそのたこが最近取れなくなった心配も込められています。近年の海の環境問題にも触れながら、地元愛にあふれた素晴らしい作品です。

中学生の部（大賞）

「学校帰りの疲れた私」は、きっと授業を終え、部活動を終え、重い足を家路へと進めていたことでしょう。そんなときもどんなときにも見える答志の海。その海とともに答志島のことが大好きでとても大切に思っている彩芭さんの思いがあふれた詩になっています。それは、答志島の優しい人達との普段の暮らしから出てくるものなのでしょう。巧みな情景描写から、読者も風や香りを感じられます。「ああ　答志島」、ここにも地元愛があふれています。

中学生の部 大賞

「ああ　答志島」

橋本　彩芭（答志中1）

ああ　どこを見ても
ああ　どこを歩いても　海が見えるんだ

私がいちばん好きなのは
学校帰りに見える海

夕日に照らされ
きらきら　きらきら　輝いている
疲れた私を　波の音が　癒してくれる

私の家から見えるのは
出航する船と　テトラポットと　広い海
どこを見ても　真っ青な海

その上に　沸き立つ入道雲
わあ　クリームソーダ
窓を開けると　潮風が吹く
まるで　しゅわしゅわする
炭酸の風を　浴びているみたい

この風は　私をどこか遠くへ
連れていってくれる

私が住むのは
海に囲まれた　答志島
出かけるときは　船に揺られて
別の町まで　別の海まで
船からは
島の周りを　一望できる

私はいつか　この島から
離れていくのかな
でも　それまでは
どこを歩いても　海が見える　答志島で
優しい島の人達と　暮らしていこう

ああ　どこにもない
ああ　こんなに素敵な　答志島

そのほかの受賞作品は次のとおりです。

小学生の部

伊良子清白賞　「かがやき」勢力頼（答志小6）

入賞　「ぼくのじいちゃん」山下波音（安楽島小6）、「電車からながめる船たち」村田真人（鳥羽小5）、「思い出の鳥羽の海」上野日向（鳥羽小6）

奨励賞　「大切な場所」木田楠陽呂（加茂小5）、「海は天気予報士だ」野村海惺（弘道小5）、「海の物語」杉浦伊織（鳥羽小6）

中学生の部

伊良子清白賞　「今年の夏とおいかけっこ」山川璃々（鳥羽東中3）

入賞　「海は支える」中村心咲（加茂中1）、「海で生きる父へ」中村華蓮（答志中2）、「いつもの風景」川原飛龍（答志中3）

奨励賞　「竜宮城へ行った日」木下雄陽（鳥羽東中1）、「海女さんってすごい」伊藤柚寿果（神島中1）、「海との生活」小久保桃愛（神島中2）

みなさんの作品は、受賞作品集として編集し配布する予定です。

※敬称略

鳥羽・海藻文化革命
岩尾博士の海藻博物記

vol.33
～海のレッドデータブック～

水産研究所 ☎㉕3316

この秋、鳥羽市は「鳥羽市 海のレッドデータブック 2023 ～鳥羽市の絶滅のおそれのある野生生物～」という本を作成、出版した。鳥羽市立図書館などで読むことができる（購入も可能だが、一般書に比べると高価）。鳥羽海域の海棲哺乳類、鳥類、爬虫類、魚類、貝類、甲殻類、無脊椎動物、そして海藻、海草類のなかで環境の変化や人間活動の影響などによって数が減り、今後見られなくなってしまう可能性のある生き物のリストである。

重要で貴重な情報であることはわかるが、これを読むと何の役にたつのか。まず、読むと面白い。写真がきれいで説明も充実しており、生息域の状況、その変化などもよくわかる。コラムやQ&Aコーナーもあり周辺知識も学べる。ニホンウナギ、イガイ、サガラメ（あらめ）、アマモ、ヒジキなどみんなが知っているような種だけでなく、名前を聞いたこともないような生き物がたくさん載っており、そこから想像するに、鳥羽の海にはこれ以上にたくさんの生き物が環境から影響を受けながら、お互いに影響を及ぼしながら生きていること、そのごく一部がイワシやサワラ、ブリやアワビなどのように我々や鳥羽を訪れるお客さんの食卓に並ぶのだろうということがわかる。海が我々に与える影響や我々が海に与える影響を理解することをオーシャンリテラシー（海とうまく付き合うためのお作法）と呼び、今後身に着けていかなければいけない感覚である。海洋観光都市の鳥羽ではこういうお作法を訪れるお客さんたちにも伝えていきたいものだ。いろんな素材、景観やもてなしで伝えていくわけだが、その時の一つのツール、話のネタにしていただければと思う。